

バドミントン競技の普及について

バドミントン専門部 埼玉県立大宮東高等学校 鳥居雄羽

バドミントンは、ネットを挟み、1対1または2対2でシャトルを打ち合う競技である。バドミントン競技の特徴は、天然の鳥の羽根で作られたシャトルが使われることによる独特のスピード感にある。世界のトップ選手になると、スマッシュの初速は400km/hを超え、これは球技種目のボール飛行速度では最速となる。しかし、それが相手の手元に達するころには60m/hぐらいに減速しており、この飛行速度の緩急差が他の競技には見られない特徴で、バドミントン最大の魅力となっている。シャトルを軽く打ち合う程度であれば、その飛行速度はきわめて遅くなり、またラケットは軽く、誰でも簡単にラリーを続けることができるため、老若男女と一緒にプレーしてもみんなが十分に楽しめるスポーツでもある。

近年、バドミントンの競技人口は堅調に増えており、普及が進んでいると言える。下表は、日本バドミントン協会の会員登録人数の推移をまとめたものであり、この10年ほどで約5万人、特に中学生と高校生を中心に増加していることがわかる。

	一般	学生	高校生	中学生	小学生	合計
2008年度	51,950人	8,690人	84,312人	63,102人	23,837人	231,891人
2012年度	58,873人	8,516人	91,604人	69,453人	22,055人	250,501人
2016年度	64,805人	8,002人	106,826人	84,043人	22,358人	286,034人

バドミントンの競技人口が増え、普及が進んでいる最大の要因として考えられるのは、日本の国際競技力の向上とそれに伴うメディアへの露出増加であろう。女子では、2007年世界選手権女子ダブルス3位、2008年北京オリンピックベスト8の小椋・潮田組、同オリンピック女子ダブルス4位の末綱・前田組、2012年ロンドンオリンピック女子ダブルス銀メダルの藤井・垣岩組、2016年リオデジャネイロオリンピック女子ダブルス金メダルの高橋・松友組、同オリンピック女子シングルス銅メダル、2017年世界選手権優勝の奥原希望（右写真）らの偉業が大きく取り上げられた。そのため、最近では「オグシオ」や「タカマツ」といったペアの愛称で、日本のトップ選手が世間に広く知られるようになってきている。また、男子でも2014年世界国・地域別対抗戦トマス杯に優勝した際には、その結果が大々的に報じられた。日本選手の国際舞台における活躍が報道される中で認知度が向上し、中学生・高校生が部活動でバドミントンを始めるきっかけとなり、それが競技の普及につながっていると考えられる。

埼玉県でも、高校生の協会登録数は2,537人（2008年度）から6,396人（2016年度）に増えている。専門部や県協会において部員数増加のために特段何かに取り組んでいるわけではないことから、まさに近年の日本トップ選手の活躍によるものと言えるだろう。ただ、部員数が増える中で公式戦に参加できず、実戦経験を積めない者が出てきていることは課題である。バドミントンを高校卒業後も生涯スポーツとして続けてもらう真の普及のためには、試合経験は必要であることから、冬の支部大会や会長杯争奪大会では、すべての選手がレベル別で大会に参加できるように工夫をしている。